

# 博物館学資料「鶴田文庫」の整理と公開化作業

浜田 弘明

キーワード：博物館学、鶴田文庫、鶴田総一郎、博物館実習、資料整理

## 1. はじめに

桜美林大学では、2003（平成 15）年春に、ダンボール箱約 250 箱に及ぶ博物館学資料「鶴田文庫」の寄贈を受け、資料の博物館学的研究と並行して、教育的活用を図りつつ、公開に向けての整理作業を進めている。この資料は、国内外の博物館学及び博物館・文化財に関する文献を中心とするもので、博物館学者の故・鶴田総一郎（以下、鶴田先生）が所蔵していたものである。

「鶴田文庫」は本学移管以前、10 年間にわたり、ダンボール箱に詰められた状態で、鶴田先生の勤務校であった法政大学博物館学研究室において保管されていた。経緯については後に詳述するが、筆者が鶴田先生の教え子であることが縁となり、最終的に本学へ移管されることとなった。資料の移管に当たっては、大学図書館の支援を受け、収蔵スペースを確保するとともに保存対策を進めてきた。また、資料の研究と整理作業については、博物館学芸員課程が主体となって進めてきた。

2006 年秋からは、資料研究・資料整理作業の一部を博物館実習の一環として位置付け、教育的活用を図ることとした。翌 2007 年には「博物館学資料『鶴田文庫』の整理・保存及び公開に関する調査・研究」が、当年から時限付でスタートした博物館学領域の科学研究費補助金（以下、科研費）に採択（基盤研究(C) 課題番号 19611008）され、2009 年度までの 3 か年計画で、本格的な資料研究と公開に向けての資料整理作業を進めることとなった。また同年、博物館学芸員課程の「少人数教育による実践対応型学芸員養成」の取り組みが、日本私立学校振興・共済事業団の私立学校等経常経費補助金「教育・学習方法等改善支援経費（教育分野の多様化・学際化に対応する教育研究）」特別補助対象事業（以下、事業団補助金）に採択され、2009 年度までの 3 か年計画で、本資料を含む学内所蔵資料の

展示・公開施設の設置と、実習の充実に向けた取組みを推進することとなった。そして2008年12月、本学に新設された「桜美林資料展示室」の一角に「鶴田文庫コーナー」を設け、一部資料を公開するに至った。

博物館及び博物館学に関する資料群としては、国内屈指の量と内容を誇る「鶴田文庫」の存在は、若干の小稿<sup>注1)</sup>や科研費採択効果等によりの博物館学研究者の間に徐々に知れ渡ることとなり、早期の全面的公開が望まれている。そこで本稿では、本学に寄贈されて5年を経過した「鶴田文庫」の現状を紹介するとともに、資料の整理・分類手法並びに、その教育的活用と公開に向けた取組みについて述べることにしたい。

## 2 博物館学資料「鶴田文庫」の概要

### (1) 博物館学研究者・鶴田総一郎について

鶴田総一郎は、戦後初の学芸員養成用テキストとして編集された、1956（昭和31）年1月刊行の日本博物館協会編『博物館学入門』の「博物館学総論」の著者として知られ、戦後から平成初期に至るまで永年にわたり博物館学研究の第一人者として活躍された。

鶴田先生は、長年勤務された国立科学博物館を事業部長で退職され、1978（昭和53）年4月から1988（昭和63）年3月までの10年間、法政大学で初代の博物館学専任教授として勤務された。筆者も、その時代に鶴田先生から博物館学を教授された一人である。法政大学定年後は、中国のフクタン大学において、博物館学部の顧問教授として引き続き活躍されたが、残念ながら、ご病気により1992（平成4）年2月に73歳で逝去された。

鶴田先生は、1918（大正6）年に長野県で生まれ、東京高等師範学校、東京文理科大学（後の東京教育大学、現在の筑波大学）に学び、第二次世界大戦中は海軍士官として艦隊基地を回っていたという。大学では生物学（とくに動物学）を専攻されていたこともあって、敗戦直後の1945（昭和20）年11月、自ら志願して、当時の文部省科学教育課に奉職し、その後、現場の国立自然教育園（現在の国立科学博物館附属自然教育園）、国立科学博物館に勤務され、30年以上にわたり日本の科学教育の振興に尽くされた。

その一方で、博物館学の進展にも尽力され、先の『博物館学入門』刊行以前の1952（昭和27）年に開催された「第一回文部省学芸員講習会」では、34歳の若さで植物園に関する講師をすでに担当されている。また1973（昭和43）年に発足した全日本博物館学会の創設に関わり、委員として永く学会に寄与されるとともに、ユネスコの国際博物館会議（ICOM）の場においても活躍され、日本人としては初の国際博物館学会第一副議長という要職も勤められた。

## (2)「鶴田文庫」の特色と保存経過

改めて言うまでもないが、鶴田博物館学は戦後日本の博物館学の根幹を成すもので、現在もさまざまな博物館学のテキストに紹介されている、「資料収集・整理保管・調査研究・教育普及」の4つの基本的機能や、「もの・ところ（ば）・ひと」の3つの基本的要素についての考え方は、先の「博物館学総論」の理論に基づくものである。このような経緯から見ても分かるように、鶴田先生の蔵書・資料には、昭和戦後期すべてにわたる日本の博物館学文献のみならず、国内唯一と見られる海外文献も相当数含まれ、国内屈指の海外博物館学関連文献が所蔵されているのである。

鶴田先生が逝去された後の、1992（平成4）年9月から12月にかけて数度にわたり、教え子であり博物館学を専攻していた筆者は、先生のご自宅を訪れ、奥様の了解の下、2階全室にまたがる書斎・図書室の資料調査を実施した。ご自宅のスチール製書架は44台に及び、図書のみならず、執筆半ばの手書き原稿類や、先生宛の文書・書簡類のほか、写真・ビデオ・図面・パンフレット、さらには国内外の昆虫標本、民族資料なども含まれていた。ご自宅2階書斎の書架配置は図1の通りで、便宜上、毎日使用されていた書斎の机に近い書架から近い順にA・B・C…と書架番号を振っていった。各書架の図書配置は、概ね分類されたものとなっていて、その内容は次の通りであった。

- A 事典・辞書類、通知文書類、執筆中の原稿類
- B 博物館学概論書（和書・洋書）、ICOM 関係資料
- C 海外博物館資料、スライド・ビデオ類
- D 国立科学博物館関係資料（昭和30～40年代）
- E 国立科学博物館関係資料（昭和30～40年代）
- F 社会教育学関係図書
- G 社会教育学関係図書、文部省関係資料（昭和20年代）、自著抜刷り
- H 社会教育学関係図書
- I 博物館関係図書、文部省関係資料（昭和20年代）
- J 博物館関係図書、展示図録、文化財関係報告書
- K 博物館関係図書、展示図録、文化財関係報告書
- L 生物学関係図書、昆虫標本類、大学講義資料・レポート類（昭和50年代）

鶴田純一郎先生宅2階書架配置図

1992. 12. 20作成

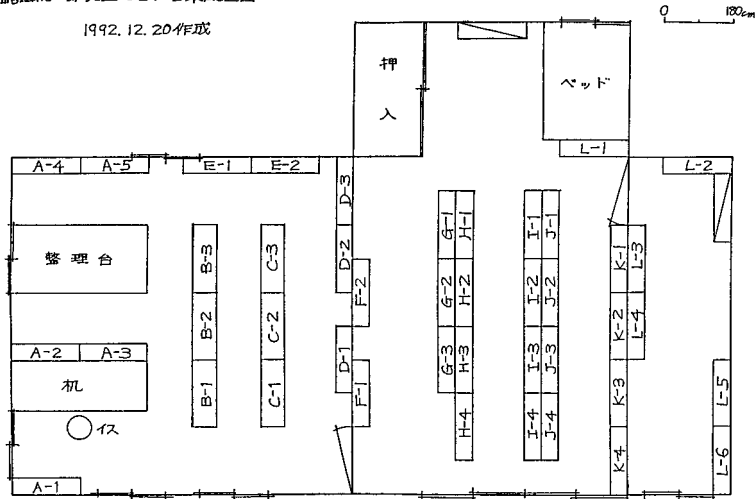


図1 鶴田先生宅2階書架配置図

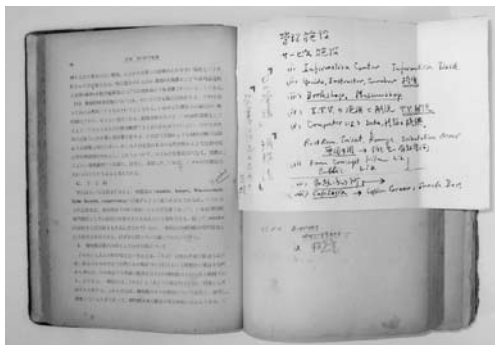


写真1 講義で使用していたテキスト



写真2 「文庫」資料の一部

これらの資料は、ご遺族のご厚意により、一括してご寄贈頂けることとなり、その後、受入れ先や搬出方法等についての協議を進め、1993（平成5）年1月、最終的に鶴田先生がお勤めになっていた、法政大学博物館学研究室（後任・段木一行教授）に「鶴田文庫」として移管することが決まり、運搬作業が行われた。その後、2002（平成14）年3月に鶴田先生の後任であった段木一行先生が退職されたことと、法政大学の学部改組準備等に伴い、「鶴田文庫」を保管するスペースの確保が難しくなり、他所に再移管することとなった。同年12月、当初から「文庫」の受入れ実務に携わってきた筆者の勤務校である、桜美林大学図書館が新たな受入れ先として決定し、2003（平成15）年2月、鶴田先生のご遺族から正式な寄贈申入れを受け、同年3月、本学へ搬入された。

資料の大半は紙資料であることから、2004年にまず保存対策として、通気性を確保することと、箱の潰れによる資料の損傷を防ぐため、プラスチック製のカゴへの入れ替え作業を進めた（写真1・2参照）。

### (3)「鶴田文庫」の資料的意義と内容

「鶴田文庫」は、ダンボール箱に換算して250箱を超える膨大な量の蔵書・資料群である。これらすべての資料を、短期間で整理・分類し目録化することは到底不可能である。そこで、現在のところ科研費研究においては、最も公開が望まれている国内外の「書籍」に重点を当てて目録化を進め、日本における戦後博物館学の発展過程を国内外の専門書から展望することを検討している。また、博物館実習（学内実習）においては、実物資料整理の実務教育のために、書籍を含めたすべての資料を対象に教育的活用を図っている。

先にも述べたように、「鶴田文庫」には、昭和戦後期すべてにわたる日本の博物館学文献が含まれ、さらには国内屈指の海外博物館学関連文献が所蔵されている。これまでの博物館学研究において、博物館そのものの歴史研究について、体系的なものとしては、椎名仙卓の『日本博物館発達史』（1988年、雄山閣出版）『図解博物館史』（1993年、雄山閣出版）『日本博物館成立史』（2005年、）及び、新版博物館学講座の『博物館史』（雄山閣出版刊行予定）、金山喜昭の『日本の博物館史』（2001年、慶友社）があるが、博物館「学史」に関する体系的研究はほとんどない。そのため、本「文庫」が日本の博物館「学史」に関する体系的研究に果たす役割は大きいと考える。

また、博物館学研究者に関する個人史的研究も事例は少なく、単行本として博物館学の祖と言われている棚橋源太郎について記した、宮崎惇の『棚橋源太郎』（1992年、岐阜県博物館友の会）が唯一で、鶴田総一郎に関しては、拙著の「鶴田総一郎と日本博物館学」（1997年、学際研究の会『学際研究』第4号）が唯一というのが現状である。このため、本「文庫」の整理及び研究の結果として、本邦初の戦後日本博物館学発達史が展観できることが期待できるとともに、博物館学研究者の個人史研究に関する方法論についても確立化への期待ができ、日本の博物館学の進展に寄与する部分は大きいと考えている。

科研費による研究では、2007年度はまず、膨大な量の「鶴田文庫」の中で、目録化に着手すべき資料（書籍）について選定を行うとともに、その整理・分類法の確立を図った。これらの体系化を確立した後、人海戦術によって目録化作業を推進するとともに、鶴田総一郎の人物史研究についても並行して進め、基本資料として鶴田先生自身の著作目録、年譜等の作成を進めている。資料整理作業の中では、60を超える著作物や原稿が確認出来ている。国内の蔵書は、昭和20年代から50年代に至る博物館・文化財・社会教育関連のものが中心を占め、海外の蔵書は10数か国に及んでいて、博物館と博物館学に関するものが多くを占めている。

2008年度は、目録化作業を引き続き推進するとともに、最終年度の目録刊行に向け、データベース化についても進めている。また、リスト化された博物館学文献の内容を検討する中から、戦後日本の博物館学の進展に関する研究会等も今後、開催を検討している。科研費の研究期間において、すべての書籍の目録化作業を終えなかったにしても、少なくとも



完成した部分までのものを目録として刊行する計画である。そして、その目録をもとに、戦後の日本でどのような博物館学研究が行われてきたのか、部分的にせよ解明することは可能と考える。

### 3. 「鶴田文庫」の整理と教育的活用

#### (1) 「鶴田文庫」の研究・教育体制

「鶴田文庫」研究の歩みは、1994（平成 6）年にまで溯る。同年 4 月、前保管校であった法政大学に「博物館学研究会」が発足し、筆者を含めた会員一部有志により「鶴田文庫整理班」が結成され、ボランティアでの整理作業と資料研究を手掛けるようになった。ここにおいて、筆者が中心となって「鶴田文庫」に関する整理・分類の基本的方法を確立した。その後、法政大学博物館学研究室や会員宅などを作業場として、約 5 年間にわたり「鶴田文庫」に関する研究会と並行して資料整理を進めたが、片手間の作業で到底片付く量ではなく、目録化を終えたのはわずか数箱分に過ぎなかった。その後、数年間の中断期間を経て、本学において整理作業と資料研究が再開されることとなった。

本学移管後は、まずスペースの確保を優先し、「鶴田文庫」の研究、整理・保管、「鶴田文庫」を活用した実習の実施に当たり、筆者の研究室はもとより、学内に鶴田文庫専用の収蔵室を 3 室（約 60m<sup>2</sup>）確保するとともに、博物館学芸員課程において整備している、資料整理作業室 1 室（約 25m<sup>2</sup>）、博物館実習室 2 室（約 80m<sup>2</sup>）の活用を図ることとした。

また、2002 年度からは、筆者の研究室を事務局として「鶴田文庫」に関する任意の研究会「鶴田文庫研究会」を立ち上げ、年数回の会合を含め、本「文庫」の整理・分類方法についての基本的検討を進めてきた。また、資料整理の具体的作業については、当初、個人研究費による学生アルバイトと、ボランティア協力によって進めてきた。2006 年秋学期からは、博物館実習プログラムに「鶴田文庫」整理・保存と調査・研究に関するものを取り入れることとなり、整理実務を兼ねた教育的活用も開始した。2007 年度に科研費の採択を受けてからは、資料整理経費としての人件費（賃金）を最も大きな予算配分とし、整理・分類作業を第一義として進めている。また、資料公開を前提と考えたとき、目録作成のためにデータベース化を進める必要があることから、その作業についても並行して進めている。

なお、科研費研究においては、博物館学がご専門の金子淳氏（静岡大学准教授）に協力を仰ぎ、2007 年度は研究分担者として、2008 年度は連携研究者として参画頂いている。さらに、2006 年度秋学期から開始した「鶴田文庫」整理・保存と調査・研究に関する博物館実習プログラムには、筆者の後輩で鶴田先生の教え子でもある横山恵美氏（豊島区立郷土資料館学芸員）を非常勤講師としてお願いしている。

## (2)「鶴田文庫」の整理方法

資料整理の方法は、法政大学博物館学研究会の鶴田文庫整理班時代に、ある程度マニュアル化し、その後、整理作業を実施していく中で徐々に改訂を加えていった。博物館実習においても、その方法を踏襲して実施している。

資料整理に当たっては、原資料の配列を重視し、もとの書架・棚配置に則して番号を記すこととしている。また、目録の作成に当たっては、市販の図書カード（キハラ製）を使用し、以下の10項目について記録化している。

- 1 分類番号（下記A～H参照）
- 2 整理番号（箱番号－通し番号）
- 3 書名（資料名）
- 4 著者名（編者名）
- 5 出版地（和書：都道府県・政令市名、洋書：国名・都市名）
- 6 出版年（西暦）
- 7 頁数
- 8 大きさ（縦×横 cm、またはA・B判サイズ）
- 9 注記（資料の内容、形態など補足的な情報を記載）
- 10 備考（カード裏面を利用）

なお、資料分類については形態別分類とし、下記のように区分している。

- A 図書（冊子、コピー製本含む）
- B 博物館カタログ・パンフレット類
- C 定期刊行物（国内外）
- D 抜刷り、新聞記事切り抜き、部分的コピー資料
- E 原稿（生原稿・草稿・メモ類）、書簡（葉書・封書類）
- F パンフレット・広告類
- G フィルム資料、会議資料、スクラップブック
- H その他資料（私物、地図・絵葉書類、授業関係書類）

目録カードは、資料1点につき1枚ずつ作成することを原則としている。また、目録カードと資料との一致を図るため、資料にも「整理番号」を鉛筆書きで振ることとしている。書籍については原則として表紙を開いた最初のページの右肩に、その他の資料には原則として資料の右肩に番号を記すこととしている。

本資料整理において、「整理番号」は重要な意味を持っていて、「箱番号－通し番号」としているが、「箱番号」に付しているa, b, cは鶴田先生宅の書架記号であり、次に付している1, 2, 3の数字は各書架から資料を箱に移した際の並び順（箱詰めの順番）を表している。書架にあった元の並びを記録するため、最後に並び順どおりに「通し番号」を付している。

「分類番号」については、現在のところ形態分類記号（A～H）を付しているが、データベース化に際しては、博物館学的分類記号を付す予定である。博物館及び博物館学中心とする図書分類は、図書十進分類（NDC など）によるものでは極めて不十分であるため、目下、独自の分類表の作成を検討中である。

また資料は、終戦直後の質の悪い紙書類なども含んでいて、相当劣化が進んだものもある。これらの資料については、劣化を防ぐため、中性紙封筒への入れ替えと中性紙箱への保管を進めている。

### （3）「鶴田文庫」を活用した博物館実習

博物館学芸員課程における「少人数教育による実践対応型学芸員養成」の実現に当たり、「鶴田文庫」の持つ役割は大きい。本学における博物館実習（学内実習）のいくつかは、実物資料を活用して実施している。博物館学芸員課程を履修する学生にとって、実物資料に触れるということは、館務実習に向けての貴重な体験となり、感動を与えるものとなっている。

2004 年度からは、本学が所蔵する実物資料、「学園史資料」と「民族服飾資料」を活用した博物館実習（学内実習）を開始しているが、この「鶴田文庫」についても、横山恵美氏を非常勤講師としてお願いし、2006 年度秋学期から実習資料として活用を開始した。いずれも、将来設置されるであろう大学博物館の核となる資料であり、学生自らがそれらを整理し、展示することは、学生主体の博物館づくりへと繋がるものと考えている。

「鶴田文庫」を活用した博物館実習は、現在「博物館学資料の調査と研究」「博物館学資料の整理と保存」の2種類がある（資料1・2参照）。前者の実習は、「鶴田文庫」を利用して、文献資料の調査法や博物館学の研究法を学ぶプログラムである。土曜日の午後半日を3日間使い、近現代資料の調査研究法を学習した上で、資料調査の実務に取り組んでいる。後者の実習は、実物資料を使用しての資料分類や資料カード作成、資料保存の方法を学ぶプログラムである。やはり土曜日の午後半日を3日間使い、「鶴田文庫」の概要と先の分類法を学習した上で、資料整理の実務に取り組んでいる（写真3）。

また、2008 年秋学期には、資料整理を終えた「鶴田文庫」の書籍類の配架を学生とともにに行った（写真4）。これは、「桜美林資料展示室」（写真5）の設置にあたり、「資料展示の実務」をテーマとした実習を設定し、「鶴田文庫コーナー」（写真6）の開設に向けて実施したものである。



## 資料1

資料収集・整理実習

## 博物館学資料の調査と研究

授与ポイント：1

担当：横山 恵美

本学には、戦後博物館学研究の第一人者として著名な鶴田総一郎が所蔵していた図書や資料が、2003年に寄贈されている。この図書や資料は「鶴田文庫」と呼ばれ、国内随一の博物館学関連資料群として博物館学界に知られるものとなっている。

「鶴田文庫」は、戦後日本の博物館や博物館学の歴史を解き明かす上で、重要な資料として位置付けられるもので、本実習では、文献を中心とした資料の調査法や、博物館学の研究方法について、「鶴田文庫」を手かがりとして学ぶ。

定 員 8 名

実習内容 近現代資料の調査研究法について 1回  
資料調査の実際 2回

実習日程	春学期	第1回	平成20年6月14日（土）	13：00～16：00
		第2回	平成20年6月28日（土）	13：00～16：00
		第3回	平成20年7月12日（土）	13：00～16：00
	秋学期	第1回	平成20年12月6日（土）	13：00～16：00
		第2回	平成20年12月20日（土）	13：00～16：00
		第3回	平成21年1月17日（土）	13：00～16：00

場 所 其中館3F 博物館実習室

その他 「博物館学資料の整理と保存」とセットで受講することをお勧めする。  
春学期・秋学期のどちらかに参加すると1ポイントを取得。  
原則として、同一学生が春学期と秋学期の両方を受講することはできない。  
3回すべてに出席することがポイント取得の基本条件。

## 資料2

資料収集・整理実習

## 博物館学資料の整理と保存

授与ポイント：1

担当：横山 恵美

本学には、戦後博物館学研究の第一人者として著名な鶴田総一郎が所蔵していた図書や資料が、2003年に寄贈されている。この図書や資料は「鶴田文庫」と呼ばれ、国内随一の博物館学関連資料群として博物館学界に知られるものとなっている。

資料には、国内の博物館や文化財関連の図書類のみならず、海外の博物館文献なども多数含まれている。本実習では、「鶴田文庫」資料の分類、カード化や保存作業など、整理と保存の実際について学ぶ。

定 員 8 名

実習内容 「鶴田文庫」の概要と分類法について 1回  
資料整理の実際 2回

実習日程	春学期	第1回	平成20年4月26日(土)	13:00～16:00
		第2回	平成20年5月17日(土)	13:00～16:00
		第3回	平成20年5月31日(土)	13:00～16:00
	秋学期	第1回	平成20年10月25日(土)	13:00～16:00
		第2回	平成20年11月8日(土)	13:00～16:00
		第3回	平成20年11月22日(土)	13:00～16:00

場 所 其中館3F 博物館実習室

その他 「博物館学資料の調査と研究」とセットで受講することをお勧めする。  
春学期・秋学期のどちらかに参加すると1ポイントを取得。  
原則として、同一学生が春学期と秋学期の両方を受講することはできない。  
3回すべてに出席することがポイント取得の基本条件。



写真3 実習風景（横山恵美氏撮影）



写真4 「鶴田文庫」配架作業



写真5 「桜美林資料展示室」入口



写真6 「鶴田文庫コーナー」

学生たちは、実物の資料と向き合うことにより、終戦直後の紙事情の悪さや、長年経過した資料に積る埃の多さ、錆びたホチキスやクリップなどが紙に与えるダメージなどを具体的に知ることが出来る。実物による実習は、学芸員にとって必要な、単に資料を取り扱う「技術」のみならず、資料に対する「観察力」「洞察力」「分析力」などの習得にも役立っているようである<sup>注2)</sup>。このような心構えは、学芸員ならずとも、社会に出てから役立つものとする。

## 4 おわりに

本学において、「鶴田文庫」の例に見るように、資料の整理から展示・公開に至るまでの一連の学芸活動を、博物館実習として学内で出来るようになったことは、学芸員養成の上で大きな進歩であり、学生とともに作り上げ運営する、将来の大学博物館設置に向けても一歩前進するものとなった。

「鶴田文庫」は、大学博物館が設置された暁には、本学の目玉コレクションとなることは間違いないであろう。実は、鶴田総一郎の名は、国内よりも海外の方がよく知られている。博物館学研究のためにヨーロッパに留学した仲間からも、国内よりもヨーロッパの方がよく知られているという話を聞く。鶴田先生は、早い時期に国内の博物館学会に見切りを付け、海外での研究発表に力を入れていた。実際、1980 年代以降の鶴田論文の多くは英文で報告されている。国際博物館会議の要職に就いていたことや、晩年、中国のフクタン大学の顧問教授に就任したとなどから見てもその辺りのことが推察出来る。このために「鶴田文庫」には、国内には数少ない博物館・博物館学に関する海外文献が多数含まれているのである。

本学所蔵の「鶴田文庫」もとに、日本における戦後博物館学と鶴田博物館学の再評価を行うことが、今後、我々に課せられた課題と言えよう。

## 付記

本稿作成にあたり、科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号 19611008 「博物館学資料『鶴田文庫』の整理・保存及び公開に関する調査・研究」の成果を利用した。

## 注

- 1) 拙稿 (2006) 「博物館学の文献コレクション」 “Museum Management Today” 8  
内田洋行知的生産性研究所  
拙稿 (2007) 「桜美林大学所蔵『鶴田文庫』について」 全日本博物館学会『学会ニュース』No.80
- 2) 横山恵美 (2008) 「博物館学研究の第一人者・鶴田総一郎の業績を掘り起こすー博物館学資料の『整理・保存』『調査・研究』ー」 桜美林大学『博物館学芸員課程年報』第 9 号